

聖マリア国際協力ニュース

第 108 号

平成 21 年 8 月 1 日発行

国際保健に関わった 15 年—退職にあたって—

国際事業部 中野博行



中野博行先生
(筆者)

今からちょうど 15 年前に、それまで勤務していた静岡県立こども病院を辞し、「国際保健」の道に進むために聖マリア病院国際協力部へ就職することになりました。最初の仕事は、アフリカの南東部にあるマラウイという平和で物の何も無い自然の美しい国で、公衆衛生プロジェクト活動を実施することでした。昨日まで聴診器を握っていたものが、次の日には保健省の次官と交渉したり、貧しい村に入ってプライマリヘルスケアを見よう見まねで行ったりというような、左も右も分からない手探りの状態でした。しかしながら、アフリカという少し地球の回転が遅いと思われるような国での活動でもあり、またプロジェクトのメンバーの協力があって、何とか 2 年間に無事に過ごすことができました。

マラウイから帰国した後は、主に短期派遣でしたが、アジア、アフリカ、南米、ヨーロッパのいろいろな国へ向かい、計 28 回にわたって専門家や調査団員として活動を続けてきました。また、1998 年 6 月からは再びマラウイで開発調査に従事することになり、約 2 年の間、断続的にマラウイを行き来し、計 13 回マラウイのリロングウェ空港に降り立つことになりました。そういうわけで、マラウイは私の第 2 の home country ということができます。

どこの国へ行ってもそれぞれ貴重な経験を得ることができましたが、中でも印象深かったのは、いちばん食糧事情が悪かった時期（1998 年 3 月）に北朝鮮の地方の病院を訪れたこと、小雪が舞う中でポーランドのアウトシュビツ収容所を見学したこと、そしてアマゾン奥地で大量の森林伐採を目の当たりにしたことでした。「人間はこんなにも悪かになれる」という思いは、今でもこの目と心に焼きついて離れません。他方、本来の活動の合間をぬって、7 回のサファリツアーに出かけ、またビクトリアの滝とイグアスの滝、ケニアの大地溝帯など、数多くの雄大な自然に接することができ、また数々の文

化遺産を見る機会に恵まれました。

15 年前とは異なり、現在、国際保健をとりまく環境は大きく変化しています。技術系も開発系も国際保健に取り組みたいという若い人たちが増えていますし、日本の国際保健もかつてのアジア重点主義からアフリカへと軸足が移りつつあります。一方で、国際協力のかたちも人材育成やシステム作りが中心となり、国際保健を実践しようとする側にも高いレベルの能力や専門性、人間性などが要求されるようになりました。このような状況にどのように対応していくべきか、国際保健は難しい時期に直面しているともいえます。

この 15 年間、故井手道雄院長、現井手義雄理事長をはじめとして多くの方々のご理解ご支援により、聖マリア病院では、まったく自由に国際保健の活動に従事させていただきました。長い歴史と経験をもつ聖マリア病院の国際協力活動に対し、私自身どこまで貢献できたか自信はありませんが、民間病院の中に独立して国際協力部をもち、そこでのびのびと国際保健の活動に参加させていただいたことにあらためて感謝するとともに、今後とも援助を必要としている世界の貧しい国々の貧しい人たちに支援の手を差し伸べる存在であってほしいと願っています。



ジンバブエ側から見たビクトリアの滝



南米イグアスの滝にかかる虹



スリランカ国健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト

国際事業部 杉本孝生



コスト分析 / 保健財政セミナー

標記プロジェクトへ 6 月 28 日から 7 月 18 日までの 21 日間出張しましたので、その活動概要を紹介いたします。

このプロジェクトは、「生活習慣病、およびその結果としての心血管病対策のための効果的および効率的な実施戦略が社会医学的根拠をもとに策定される」ことを目標として、スリランカ国保健省と JICA の間で合意され、2008 年 4 月から 5 年間の予定で開始されました。私は、この JICA 側チームに、コスト分析専門家として

参加しており、今回が 2 回目の派遣です。スリランカには、2005 年から 2007 年にかけて実施された「保健システム管理強化計画フェーズ II (EBM スタディ)」に参加していたこともあり知人も多く、短期間の派遣ですが充実した活動ができたと考えています。

さて、少し具体的な活動内容を説明します。私には、生活習慣病検診およびフォローアップにかかるコストを分析することが、プロジェクトの活動の一つとして課せられています。勿論、私だけで実施するわけではなく、スリランカ側との共同作業になりますので、関係者と協議して作業の進め方を検討しながら進めていくことになります。

わずか 3 週間という限られた期間ですから、実際にコストを計算、分析する作業ではなく、(※右頁へ続く)

(※左頁より続く) 作業を実施する体制を整備することが今回の派遣で求められました。そこで、1) 保健医療従事者と経済学者、会計士等が一同に会する機会を創出すること、2) 生活習慣病対策に関する「コスト」の概念を討議し、スリランカに最も効率的・効果的な介入政策を議論すること、を目的として、「コスト分析 / 保健財政セミナー」の開催を支援しました。

このセミナーには、保健省、地方政府保健局、大学医学部・経済学部、医師会等から約 30 名が参加し、スリランカ国の今後の保健財政面の課題としての生活習慣病対策の重要性が議論されました。また、このセミナーを受けてプロジェクト内のコスト分析ワーキンググループ会議が開催されました。

保健省のチーフアカウント (財政面のトップ) を議長とするこのワーキンググループでは、実際の予防活動や健康増進活動をどのようにコスト面から分析する必要があるか、という視点から議論され、1) 予防活動実

施手順に沿ったコスト分析を実施する、2) 検討が進められている異なったモデルを比較する、3) コスト・ベネフィット分析を実施する、ことが決まりました。



パイロット検診実施後の反省会

今年の 4 月、永年続いていた LTTE との内戦が終結したスリランカですが、まだまだ主要な場所での検問は継続している状態でした。戦後処理が少しでも早く終わり、平和で安定した経済基盤に裏づけされた、新たな保健医療体制を構築するお手伝いができることは、聖マリア病院に勤める職員の一員として大変光栄に思います。

新生児センターでの研修を修了して

韓国 忠南大学校病院 金智娜



金智娜さん (筆者)

私は小児科専門医になり今年で 3 年目になります。日本へ研修に行くことをずっと夢見ていました。医学が発達した日本では新生児をどのように治療しているのか、興味が膨らむ一方で、初めて訪れる日本に対する不安も少しだけありました。しかし空港に到着すると国際事業部の矢山さんと通訳の池田さんが迎えに来てくださって、何の苦勞も無く聖マリア病院の宿舎にたどり着くことができたので、まずはホッとしました。宿舎のリアンハウスでの生活は、湿度が高いことを除いて非常に快適でした。ハウスキーパーはとても親切で、清掃も行き届いており、お部屋はいつもきれいに保たれていました。

NICU は想像していたよりずっと広くて驚きました。初めて回診を見学する時、大勢の中に自分一人だけ外国人が混じっているという状況に怖気づきそうになりましたが、新生児科部長の浦部先生が明るく笑って挨拶してくださったので安心しました。回診では権威的な韓国とは違い重苦しさ無く、皆自由に意見が言える雰囲気は新鮮に感じられました。また浦部先生がそれぞれの患児の全身状態について、韓国語を織り交ぜながら、親切に詳しく教えてくださったことにはたいへん感謝しています。

研修を通して感心した点、印象に残った点はたくさんあります。まず感染を防止するための様々な努力がなされていることに感心しました。私たちの病院よりも多くの看護師が配置されており、しかもその看護師たちが笑顔をやさず、熱心に業務に励んでいる状況には羨ましさを感じました。医師たちも皆責任感に溢れ、最善を尽くして業務を遂行しておられる姿に胸を打たれました。特に超未熟児

スタディツアーの実施について

今年も 10 ~ 11 月頃にインドネシア、ラオスのスタディツアーを企画します。詳細は決定しだいご案内します。

に対しては、非常に細心の注意を払って治療が行われており、患児への負担を最小にするよう努力されていることが見て取れました。血液採取から静脈注射の施行まで担当医が直接行っていることも印象的でした。そして少ない検体採取量できちんと検査結果が出てくることに驚かされました。私の病院に比べると、一人の医師が担当する患児数が少ないので可能なかもしれませんが、毎日の診療記録が徹底して詳細に書かれている点にも感銘を受けました。また心を平静にさせる BGM が常に NICU 内に流されており、このような細かい点にまで患児たちへの配慮がなされていることにも感心しました。大動脈縮窄症のカテーテル治療を見学できたことは、今回の研修の中で最も貴重な経験でした。優れた医療機器と技術レベルの高さをとても素晴らしく思いました。また壊死を発症した患児に対しては、他のいろいろな診療科と協力しながら対応する姿も印象に残りました。

生活面においても、あらゆる面で不便さを感じさせないような配慮をしていたが、とても難しかったです。またどこに行っても、笑顔で親切に歓迎してくださった日本人の方々に対して、本当に良い印象を持ちました。私は小児科医として将来の進路を定める時期にさしかかっていますが、今回の研修は私にとって大きな転換点になったと感じています。これからどんな部分を勉強しなければならぬのか、私力から不足している点の一つ一つ確認することができた時間でした。いつかまた訪れる機会があるのかわかりませんが、聖マリア病院を永らく忘れることはできないでしょう。

※ 金智娜 (Kim Gee-na) さんは 7/7 ~ 7/17 の期間、当院新生児センターで研修を受けられました。

今月の動き

- 【派遣】
 - ・ 8 月 16 日 (日) ~ 29 日 (金)
 - 山崎裕章 (国際事業部) : JICA ミャンマー国主要感染症対策プロジェクトへ短期専門家として派遣。
- 【受入】
 - ・ 8 月 26 日 (水) ~ 9 月 4 日 (金)
 - 韓国カトリック医療協会 看護師グループ研修 (8 名) を実施。